

恐しき通夜

海野十三

青空文庫

1

「一体どうしたというんだらう。大変に遅いじゃないか」

眉を顰めて、吐きだすように云つたのは、赭ら顔の、でっぷり肥つた川波船二大尉だつた。窓の外は真暗で、陰鬱な冷気がヒシヒシと、薄い窓硝子をとおして、忍びこんでくるのが感じられた。

「ほう、もう八時に二分しか無いね。先生、また女の患者にでも掴つてんのじゃないか」
腕時計の硝子蓋を、白い実験着の袖で、ちよいと丸く拭いをかけて、そう皮肉つたのは白哲長身の理学士星宮羊吾だつた。

これは第三航空試験所の一部、室内には二人の外誰も見えない。だがこの二十坪ばかりの実験室には、所も狭いほど、大きな試験台や、金具がピカピカ光る複雑な測定器や、頑丈な鉄の枠に囲れた電気機械などが押しならんでいて、四面の鼠色の壁体の上には、妖怪の行列をみるようなグロテスク極まる大きい影が、匍のぼっているのだつ

た。

「キ、キ、キ、キキキツ」

ああ厭いやな鳴き声だ。

ホト、ホトと、入口の重い扉との叩かれる音。二人は、顔を見合わせた。

クルクルと把ハンドル手の廻る音がして、扉ドアがしずかに開く。そのあとから、ソツと顔が出た。

色の浅あぐろい、苦味にがみの走ったキリリとした顔の持ち主——大蘆原軍医おおあしはらだった。

室内の先せんきやく客である川波大尉と星宮理学士との二人が、同時にハアーツと溜息ためいきをつ

くと、同時に言葉をかけた。

「遅いじゃないか。どうしたのか」と大尉。

「あまり静かに入ってきたので、また気が変な女でもやってきたのかと思つたよ。ハツハツハツ」と星宮理学士が、作つたような笑い方をした。

「いや、遅くなつた。患者かんじやが来たもんで（と、『患者』という言葉に力を入れて発音しながら）手間がとれちまつた。だが、お詫わびの印しるしに、お土産を持ってきたよ、ほら……」

そういつて大蘆原軍医は、入口のところでは何やら箆ざるの中に盛りあがった真黒なものを、さしあげてみせた。

「何じや、それは……」

「榮螺^{さざえ}じやよ、今日の徹夜実験の記念に、僕がうまく料理をして、御馳走をしてやるからね」大蘆原軍医はそう云つてから、筈^{はず}の中から、一番大きな榮螺を掴^{つか}みあげると、二人のいる卓^{テーブル}上^{の上}のところまで持つてきた。磯^{いそ}の香^かがプーンと高く、三人の鼻をうった。すばらしく大きい、獲^とれたばかりと肯^{うなず}かれる新鮮な榮螺だった。

「大きな榮螺じやな」と大尉は喜んだ。

「軍医殿は、人間のお料理ばかりかと思つていたら、榮螺のお料理も、おたっしやなんだね」と、星宮理学士が野次^{やし}つた。

そこで三人の間にどつと爆笑が起つた。だが反響の多いこの室内の爆笑は大変賑^{にぎや}かだったが、一旦それが消えてしまうとすると、反動的に、墓場のような静^{せいじやく}寂^{じやく}がヒシヒシと迫^{せま}つてくるのだった。

「キキキツ」

とまた鳴いた。

「可^{かわい}哀^{そう}想^{そう}に、鳴いているな」そう云つて大蘆原軍医は、大きい鉄^{てつ}杵^{わく}のなかを覗^{のぞ}きこんだ。そこには大きな針金で拵^{こしら}えた籠^{かご}があつて、よく肥つたモルモットが三十匹ほど、藁^{わら}ど

床の上をゴソゴソ匍いまわっていた。

「じゃ、そろそろ実験にとりかかろうじやないか」と星宮理学士が、腰をあげて、長身をスツクリと伸のばした。

「よかろう」研究班長の川波大尉は、実験方針書としるしてある仮綴かりとじの本を片手に掴つかみあげた。「第一測定は、午後九時カツキリにするとして、まず実験準備の方をテストすることにしよう。大蘆原軍医殿に、モルモットを硝子鐘ガラスがねのなかに移して貰おう。それから、星宮君は、すぐ真空唧筒しんくうポンプを回まわ転してくれ給え」

航空大尉と、理学士と、軍医との協同実験が始まった。これは川波大尉が担任する研究題目で、航空学に関する動物実験なので、気圧の低くなった硝子鐘ガラスがねのなかに棲息せいそくするモルモットの能力について、これから一時間毎に、観測をしてゆこうというものだった。大尉は専ら指揮もっぱを、理学士は器械部の目盛を読むことを、そして軍医がモルモットの動物反応を記録するのが役目だった。この三人の学者は、毎時間に、五分間を観測と記録ついでに費すと、故障の突発しないかぎり、あとの五十五分間というものを過たぐすのに、はなはだ退屈たいくつを感じるのだった。

2

「この調子で、明け方まで頑張るのは、ちと辛いね」と大蘆原軍医が、ポケット・ウイスキーの小さいアルミニウム製のコップを、コトリと卓上テーブルの上に置きながら云うのだつた。

「軍医どのの栄螺料理さざえが無ければ、儂わしは五十五分間ずつ寝るつもりだった」と川波大尉が、ポカポカ湯気ゆげのあがつている真黒の栄螺の壺つぼを片手にとりあげ、お汁をチュツと吸つてから、そう云つた。

「大蘆原軍医殿は、この栄螺の内臓を珍ちん重ちゆうされるようだが、僕はこんな味のものだとは、今日の今日まで知らなかつた」と、星宮理学士は、長い箸はしを器用に使つて、黄色味がかつたプリプリするものを挟はさみあげると、ヒョイと口の中に抛ほうりこんで、ムシヤムシヤと甘味うまそうに喰べた。

「そうです、これは一種異様の味がするでしょう。お気に入りでしたか星宮君」と軍医は

照れたような薄笑いを浮べ、ダンディらしい星宮理学士の口許くちもとに射るような視線をおくった。

「そうかね、僕の方の栄螺は、別に変った味もないが、どうれ……」と大尉は、向うから箸をのぼして、星宮理学士の壺焼の中を摘もうとした。

「吁あツ、川波大尉」駭おどろいたように軍医はそれを遮さえぎった。「まだ栄螺は、こつちにもドツサりありますから、こつちのをおとり下さい。なにも、星宮君が陶酔とうすいしている分をお取りなさらなくても……」

そういつて、何故か軍医は、大尉の前に別の壺焼を置いたのだった。

「あ、そうか、これはすまない」と、大尉はちよつと機嫌を損じたが、アルコールの加減で、すぐ又元のような上機嫌に回復した。「こんなに新しいと、いくらでも喰えるね」

「いや、今僕の喰ったやつは、中で一番違つた味をもっていてね、珍らしい栄螺だった」と、理学士はまだ惜しそうに、空からになった殻からを振り、奥の方に箸をつきこみながら、舌なめずりをした。「やあ、いくら突ついても、もうでてこないや」

「僕の御馳走が、お気に召して恐縮きようしゆくだ」大蘆原軍医は、ウィスキーをつぎこんでも、一向赤くならない顔をあげていった。「だが、食うものがボツボツ無くなり、こう腹の皮

が突つ張つてきたのでは、一層睡くなるばかりだね。——それじゃ、どうだろう。これから皆で、一時間ずつ交替で、なにかこう体験というか、実話というか、兎に角、睡気を醒ます効目のある話——それもなるだけ、あまり誰にも知られていないという話を、此の場かぎりという条件で、喋ることにしちや、どうだろうかね」

「ウン、そりや面白い」と星宮理学士が、すぐ合槌をうった。

「いま九時をすこし廻つたところだから、これから十時、十一時、十二時と、丁度真夜中までに、三人の話がひとまわりするンじゃ。川波大尉殿、まず君から、なにかソノ秘話といったようなものを始め給え」

「儂に口を開かせるなんて、罪なことだと思ふが」と川波大尉は、ちよつと丸苳の坊主頭をクルリと撫でながら、「どうせ三人きりのことだ。一人脱けたって面白くあるまい。それじゃ、何か話そうか、ハテどんなことを喋つたものか……」

第一話 川波大尉の話

「大蘆原おおあしはらさんが云つたとおり、本当にこれは此場このばかぎりの話なんだが、一昨年おとしの秋の事、南太平洋で海軍の特別大演習があつた時の事だつたが、演習もいよいよ峠とうげが見えて来た四日目。場所は、退却を余儀なくされている青軍せいぐんの最前線にあたる土佐湾とさわんの南方五十裡カイリの洋上だつた。

儂なまは、この青軍の航空母艦『黄鷺きわし』に乗つていて、戦闘機を一台受持つた。こいつは最新型というやつではないが、儂達わたちには永年ながねん馴染なじみの、非常に使いよい飛行機だつた。当時儂の配属はいぞくは、第十三戦隊の司令で、僚機りょうきとして、同型の戦闘機二台を引率いんそつしていたのだつた。わが青軍の根拠地の土佐湾は、いよいよ持ちきれなくなつて、横須賀軍港よこすかぐんこへ引移ることに決定した。多分、その日の夜に入ると、北上ほくじようしてきた赤軍せきぐんは、勢いに乗じて、大拳土佐湾たいきよの夜襲戦やしゆうせんを展開することだろうと、想像された。その時刻までに、わが青軍の主力は、前夜魚雷ぜんやぎよらいに見舞われて速力が半分に墜ちた元の旗艦きかん『釧路』を掩護えんごして、うまく逃げ落ちねばならなかつた。それには日没前にちぼつぜんまで、航空母艦『黄鷺』を中心とする航空戦隊が、赤軍の出てくる鼻先を、なんとかして喰い留めくいとねばならなかつたのだつた。

儂^{わしたち}達の戦闘第十三戦隊の三機は、幾^{いくたぎ}度となく母艦^{ぼかん}の滑走甲板^{かつそうかんばん}から、空中へ急角
 度に舞いあがって、敵機とわたり合い、軽巡^{けいじゆん}の戦隊を脅^{おびや}かした。儂達の戦隊の活躍は、
 自分でいうのは少しおかしいが、実に目覚まし^{めざまし}いものだったよ。殊に僚機の第二号機に竹^た
 花^{けはな}中尉、第三号機には熊内^{くまうち}中尉が単身^{たんしん}乗りこんでいたが、その水際^{みずぎわ}だった操縦^{そうじゆう}ぶ
 りは、演習という気分をとおりすぎて、むしろ実戦かと思われるほど壮快無比なもので、
 イヤ壮快すぎて、物凄^{ものすけ}いと云った方が当てているくらいだった。いつも三機雁行^{がんこう}の、
 その先登に立っていた司令機内のこの儂は、反射^{はんしゃ}凸面鏡^{とつめんきやう}の中に写る僚機の、殺気だ
 った戦闘ぶりを、ちよいちよい眺めては、すくなからず心配になってきたものだ。夕刻に
 近づくと、かねて気象警報が出ていたとおり、灰色の雲は低く低くたれ下って来、白く浪^な
 立^{みだ}ってきた洋上に、霧がすこしずつ濃くなってくるのだった。

(今夜は、どうしても一と嵐^ひくるな)

味方にとつては、いよいよ事態は不幸に向っていった。西に傾^{かたむ}いた太陽は、密雲^{みつうん}の蔭
 にスツカリ隠れてしまったり、そうかと思うと急にその切れ目から顔を現わして、真赤な
 光線を、機翼^{きよく}に叩きつけるのだった。丁度、そのときだった。あの一大椿事^{だいちんじ}が突発した
 のは……。

ここまで云えば、君達も感付いたろうが、この椿事は、翌朝の新聞紙に『大演習の犠牲。青軍の戦闘機二機、空中衝突して太平洋上に墜つ。乗組の竹花、熊内両中尉の死体も機影も共に発見せられず。原因は密雲のためか……』などと書きたてられたあの事件なのだ。海軍当局の調査も、新聞の報ずるところとは大した相違がなかった。無論、現場付近にいた唯一の人間である儂は、調査委員会の席上で証言をさせられてこんなことを云った。『青軍の危急を救うべく、敵前に於て危険きわまる低空の急旋転を行いたるところ、折柄洋上には密雲のために陽光暗く、加うるに霧やや濃く、僚機との連絡至難となり、遂に空中衝突を惹起せるものなり』てなことを云ったので、不可抗力の椿事として、両中尉は戦死と同格の榮譽を担ったわけだった。だが此処に話がある！

儂は僚友のために、実は偽りの報告をしたのだった。事實はこうだった、いいかね。あのとき、洋上を飛翔していた儂は、いつの間にやら僚機から遠く離れてしまっているのに気がついたのだった。吃驚して後を見ると、遙か下の空で、二機はしきりに横転をやっているじゃないか。これは無論、儂の指令じゃない。なにか故障を起したのかなとも考えたので、儂は方向舵を静かに廻しながら、尚も注意していると、どうも故障とは様子がちがう。一機が他の一機を執拗に追いかけているようなのだ。一機が、思いきった

逆宙返りをうって遁れると、他の一機も更に鮮かな宙返りをうって迫り、機翼と機翼とがスレスレになるのだった。儂は、この追駆けごっこが、冗談ではないことに直ぐ気がついた。このまま抛って置けば、二人とも死ぬ。何とかして二人を引離す頓智はないものかと考えたが、咄嗟のことで巧い術策が浮かんでこない。

望遠鏡を目にあてて、よくよく眺めてみると、齒を剥いて追っかけている方は、熊内中尉だった。追いかけているのは竹花中尉、中尉の顔が、丁度雲間から現われた斜陽を真正面に浴びて、儂のレンズの底にハッキリと映じたが、彼は飛行帽も眼鏡もかなぐり捨てて、片手を空しく顔前にうち振り、彼の顔はキリストの前に立った罪人のように、百の憐愍を請うているのだった。『おれが悪かった！ 何でも後から相談に応じるから、おれを死なせないで呉れ給え』と、そんな風に見える真青の顔だった。そして尚も、助かろうとして逃げた。竹花中尉には、熊内中尉の恐ろしい決心のほどが、ハッキリと判るのだった。

実は二人の間には、こんな訳があるのだった。二人は元々K県出の、たいへん仲の善い僚友だったが、あの事件の時から一年程前に、儂も識っているがAという若い女が、二人の間近かに現われてからというものは、急に二人は背いて行った。そのAという女は、

非常に眼と唇とのうつくしい、そして色がぬけるように白くて、真紅な帯や、真紅な模様の羽織なんかがよく似合う少女だった。笑うと、ちよいと開いた唇の間から、真白な糸切り歯ばがニツと出てくるのが、また何とも云えない程可愛らしく見えた。そのAさんという少女に、二人が同時に惚れこんだのも、全く無理のないことだった。しかしお互に、相手の気持を知ると、二人は二十幾年の友情も、プツリ忘れてしまった。彼等は、表面は何喰わぬ顔で勤務をしていながら、内心では蛇と狼とのように睨み合っていたのだ。彼等は悪あく辣らつな手段で、お互を陥たがれ合おとした。自分の血で、相手の骨を洗った。

その結果、Aという女は、遂に竹花中尉の方へ傾いてゆき結納ゆいのうまでとりかわされ、この演習が済むと、直ちに水交社すいこうしゃで婚礼が挙げられることにまで、事がきまっていたのだ。あわれ、恋に敗れた熊内中尉は、悪魔におのが良心を啄つむに委ませた。そこで中尉の恐ろしい復讐が計画されたのだった。

『竹花にあの女を与えてなるものか。また、自分を此処まで引張りまわした女に、素直に幸福を与えてなるものか』そういつて熊内中尉は歯を喰いしばったのだ。『ようし、見て居おれ、竹花のやつを、地獄へひきずりこんでやるんだ。やつが、おれの計画に感付いたとき、どんな泣きツ面をするか。そいつを見るのが、ああ、せめてもの娛たのしみだ。吠ほ

えろ、喚^{わめ}け、竹花中尉！」

熊内中尉の計画は見事に効を奏したのだった。儂があの時覗いた竹花中尉の『死』への反発『生』への執^{しゅうちやく}着^はに腫^はれあがった相^{そうぼう}貌^{ぼう}は、あさましいというよりは、悪鬼のように物凄^{ものすご}いものだった。さすがの儂も眼^{まなこ}を蔽^{おほ}った。やがて気がついてみると、二機は互に相手の胴中^{かみあ}を噛^か合^あったような形になり、引裂^{ひきちぎ}かれた黄色い機翼^{きよく}を搦^{から}ませあい、白煙^{しろけむ}をあげ海面^{かみ}懸^かけて墜^{おち}落^おしてゆくのが見えた。それが遂^{ついに}に最後^{さいご}だった。戯^{たわむ}れに恋^こはすまじ、戯^{たわむ}れでなくとも恋^こはすまじ、そんなことを痛感^{いたかん}したのだった。儂は、あの日のことを思い出すと、今でも心臓^{こころ}が怪^{あや}しい鼓動^{こどう}をたてはじめるとのじやよ」

そう云^いつて川波大尉^{かわな}は、額^{ぬか}の上に水^{みず}珠^{たま}のように浮^うき出^でた油汗^{あぶらあせ}を、ソツと拭^{ぬぐ}ったのだ。丁^{ちやうど}度^どその時^{とき}、時計^{とけい}は午後十時^{ごごじゅうじ}のところ^{ところ}に針^{かざな}が重^{かさ}ったので、三人^{さんにん}はその儘^{まま}、黙^{もくもく}々と立^たつて、測定装置^{そくていしるう}の前に、並^{なら}んだのだった。

3

第二話 星宮理学士の話

「さて僕には、川波大尉殿のような、りようきたん 猟奇譚の持ち合わせが一向にないのだ。といって引下るのも甚だ相済まんと思うので、僕自身に相応した恋愛戦術でも公開することにしよう。

さつき、大尉どのは、『戯れに恋はすまじ、戯れならずとも恋はすまじ』と、ぜんぼうず 禅坊主かしゅうどういん 修道院生徒のようなせいく 聖句を吐かれたが、僕は、どうかと思うね。それなら、ちよいと伺つてみたい一条がある、とでもねじ込みたい。大尉どのは、あのうるわ 美しい奥様のことなんだ。あんな見事なれいじん 麗人をお持ちでいて、『恋はすまじ』は、すさまじいと思うネ。僕はくわ 詳しいことは一向知らないけれど、余程のロマンスでもないかぎり、大尉どのに、あのれいじん 麗人がかしく筈がないと思うんだ、いや、大尉どのはふんがい 憤慨せられるかも知れないけれどね——。で僕にきたん 忌憚なく云わせると、大尉どのは結論は、本心のばくろ 暴露ではなく、何かこう為めにせんとするところのかめんけつろん 仮面結論だと思うのだ。大尉どのは真意は何処にある？

こいつは面白い問題だ——と、イヤにむきになって喰つてかかるような口を利くのも、実はこうしないと、これからの僕の下手な話が、睡魔を誘うことになりはしないかと、心配になるのですね。

そこで、僕に云わせると、失恋の極、命をなげだして、恋敵と無理心中をやった熊内中尉は、大馬鹿者だと思う。鰻の香を嗅いだに終った竹花中尉も、小馬鹿ぐらいのところさ。何故つて云えば、熊内中尉の場合に於て、Aとか云う女を手に入れることは、ちよつとしたトリックと手腕さえあれば、なんの苦もなく手に入るのだった。Aは竹花中尉と結婚することにはなっているが、熊内中尉を別に毛虫のように芯から嫌っているわけではないのだから、いくらでも、竹花中尉との縁組をAに自らすすんで破らせる位のことは、なんなくできるんだ。何しろ相手は、東西も判らない未婚の娘なんじゃないか。

人の細君は誘惑できないというが僕は二日で手に入れた記録がある。その細君を仮りに——そうだねB子夫人と名付けて置こう。色が牛乳のように白く、可愛い桜桃のようさくらんぼに弾力のある下唇をもつていて、すこし近視らしいが円らかな眼には湿つたように光沢のある長い睫毛が、美しい双曲線をなして、並んでいた——というまっげと、なんだか、川波大尉どのお話のAさんという少女に似ているところもあるようだね。とにかく其のB子夫

人は、僕の食アペタイト慾を激しくあおりあげたのだった。食慾を感じるのには、胃袋が悪いんだらうか、その唆そかすような甘い香かを持つた紅い果実が悪いのだらうか、どっちだろうかと考えたほどだった。だが、僕は日頃の信念に随あつて、飽あくまで科学的に冷静だった。筋書どおりにチャンスが向うからやつて来るまで、なんの積極的な行動もとらなかつた。

聽やがてチャンスは思いがけなく急速にやつて来た。というのは、B子がその夫君ハズと四五日間きま氣拙まい日を送つた。その動機は、僅かの金が無いことから起つたのだった。その次の日は、彼女の夫君ハズが出張に出かけることまで僕のところには解つていた。B子夫人はその日、某アパートへ買ハいもののため、彼女の郊外の家を出掛けたが、その道すがら突然アパツシユの一団に襲ハわれたのだった。小暗こくらい森もり蔭かげに連れ込まれて、あわや狼藉ろうぜきというところへ飛び出したのが僕だった。諸君はそのような馬鹿なことがと唾わらうかもしれないが、B子夫人も普通の婦女とおなじく、この昔風な狂言暴行を疑ういもせで、泪なみだを流して僕に感謝したばかりか、記念のためというので、奇妙な彫ほりの指環ゆびわまで贈物として僕によこしたじやないか。そのとき僕は、『御主人には黙もつていられた方がいいですよ』と云うことを忘れなかつた。心に空虚のあつたB子夫人が、その胸に如何なる夢を描えいたことやら、また其の夫君ハズが出張にでかけた翌日、偶然のように訪ねていった僕をどんなに歓待かんだいしたか。女な

んか、新しがつても、本当は古い古いものなのさ」

こう云つて星宮学士が、胸の底まで気持よく吸いこんだ煙草の烟を、フーツと静かに吐きだしたが、この話を傍できいていた川波大尉の顔がめん面が、急にひきつるように硬こわばつてきたのに、まるで気がつかないような顔をしていたのだった。

「それから、こんな話もある」と学士は第二話のつづきを又語りはじめるのだった。「こいつは、僕が一番骨を折つた女だったが、カツキリ半年も懸つた。無論その半年の間、僕はこの女ばかりを覗ねらつていたのでは無く、沢山の若い女を獵あさりあるいている其その片手間に、一つの長篇小説でも書くつもりで、じっくり襲いかかつて行つたのだ。その女は、しつかりした家庭に育つた九條武子くじょうたけこのようなノーブルなお嬢さんだった。彼女の名前を、仮りにC子（とそう云つて、星宮学士は何故かハツと呼吸を止めた）——そう、C子と呼ぼう。この少女は、はちきれんような素晴らしい肉体を持つているのに、精神的には不感性ふかんしょうに等しく、無類の潔癖けつぺきだった。すべて彼女の背後にある厳格な教育が、彼女をそうさせたのだった。二三度誘つたが、こりや駄目だと思つた。そのまま賞味しょうみしてしまう手段はあつたが、それでは充分美味おいしく戴いたけない。そう悟つたので、僕は一夜脳髓をしばつて、最も科学的な方法を案出した。幸い僕は家庭教師として、彼女に数学を教える役目を得た

ので、それで時々会つては、音楽会に誘つた。次は映画の会へ連れてつた。その映画も、教育映画から次第にロマンティックなものへ、それから辛うじて上演禁止を免れたカットだらけの映画へ、更にすすんではカットのない試写ものへと移つて行つた。彼女は別に眉を顰めはしなかつた。というのは、この速力が如何にも緩慢だつたからだ。映画を見あきると、レヴィウを見た。宝塚の可愛いレヴィウから、カジノ・フォリー、プペ・ダンサントと進み、北村富子一座などというエロ・ダンスへ移り、アパツシユ・ダンスを観た。C子が僕と踊りたいといひ出したのは恰度その頃だつた。僕は一応それを押しとどめたが、それは無論、手だつた。興奮しきつた彼女は、僕の忠告に、倍以上の反発をもつて舞踊を強いた。僕達は、あの淫猥なアクロバティック・ダンスを見て帰ると、其の次の日には、僕の室をすっかり閉めきつて、二人で昨夜のダンスを真似てみるのだった。勿論何の経験ももたない僕達に、あんなに激しいダンスが踊れるわけはなかつた。僕達は不意に手を離してしまつて床の上にと抛げだされて瘤を拵えたり、ドツと衄血を出したり、筋をちがえた片腕を肩に釣つて疼痛にボロボロ涙を流しながらも、奇怪なる舞踊をつづけたのだった。だが僕達の身体は清浄で、C子はまだ処女だつた。時分はよしと、僕は彼女を、秘密室のあるダンス場めぐりに連れ出したのだった。それから四五日経

つて、C子は逆に僕を挑んだのだ。だが僕は素気なく拒絶した。拒絶されると反つて嵐のような興奮がC子の全身に植えつけられたのだ。すべて僕の注文どおりだった。其の翌日、僕は、六ヶ月かかつて発酵させたC子という豊潤な美酒を、しみじみと味わつたことだつた。

こうして僕が味わつた女の数は、百を越えている。こんなことを、貞操蹂躪とか色魔とか云つて大騒ぎする奴の気が知れない。『洗滌すれば、なにごとともなかつたと同じように清浄になるのだ』とロシアの若い女たちは云っているじゃないか。それに違いない。誰もが、徹底して考えて実行すればいいのだ。そりや中には捨てた女からピストルをつきつけられることもあるが、何でもない。万一射ちころされたとしても散々甘味な酒に酔い痴れたあとの僕にとつて『死』はなんの苦痛でもなければ、制裁とも感じない。僕の家の上にはふくよかな肘突があるが、その肘突の赤と黒との縮緬の下に入っているものは、実は僕が関係した女たちから、コツソリ引き抜いてきた……」

「オイ星宮君、十一時がきた！」と、此の時横合いから口を入れた大蘆原軍医の声は、調子外れに皺枯れていた。

4

第三話 大蘆原軍医の話

「それでは私が、今夜の通夜物語の第三話を始めることにしよう」そう云つて軍医はスリ
ー・キャツスルに火をつけた。

「川波大尉どののお話といま聞いたばかりの星宮君の話とは全然内容がちがつている癖に、恋愛論とか性愛論とか、それが含まれているところには、一種連続点があるようだ。そこで、私の話も、勢いその後を引継いだように進めるのが、面白いように思う。ところが丁度ここに偶然、第三話として、まことに恰好な物語があるんだ。そいつを話すことにしよう。

実は今夜、私がここへ出勤するのが、常日頃に似合わず、大変遅れてしまつて、諸君に

御迷惑をかけたが（と云つて軍医は軽く頭を下げた）何故私が手間どつたのか、それについてお話ししよう。

今夜七時、私の自宅に開いている医院に、一人の婦人患者がやってきたのだ。美貌びぼうのせいもあるだろうが、二十を過ぎたとは見えぬうら若い女性だった。その、少女とでも云いたいような彼女が、私に受けたいというのは、実は人工流産だというんだ。一体、人工流産をさせるには、医学的に相当の理由が無くては、開業医といえどもウツカリ手を下せないのだ。母体が肺結核はいけつかくとか慢性腎臓炎まんせいじんぞうえんであるとかで、胎児たいじの成長や分娩ぶんべんやが、母体の生命を脅すおびやかような場合とか、母体が悪質の遺伝病を持っている場合とかに始めて人工流産をすることが、法律で許されてある。若しこれに反して、別段母体が危険ひんに瀕ひんしてもないのに、人工流産を施すほどこと、その医者は無論のこと、患者も共ども、墮胎罪だたいせいとして、起訴されなければならない。

さて、その若い女の全身に互わたつて、精密な診断を施したところ、人工流産を施すほどこべきや否いなやについて、非常に困難な判断が要ることが判つた。それというのが、打ちみたところ、この女は立派に成熟していたが、すこし心神しんしんにやや過度の消耗しょうもうがあり、左肺尖ひだりはいせんに軽微びじやくながら心配の種になるラッセル音が聴こえるのだ。この患者の体力消耗が一時的

現象で、このまま回復するのだと、肺炎はいせん加答かた児かたるも間もなく治癒ちゆするだろうから、折角始め得た子宝こだからのこともあり、流産をさせないで其の儘まま、正規分娩まにまで進ませていいのだ。だが若し、この消耗が恢復せず、更に悪化するようなら、断然だんぜん流産をさせて置く方がよろしい。しからば、この女性について、見込みはいずれであろうか、と考えると、これがどつちにも考えられるのだ。私として、これは惑わざるを得ない事柄だった。

『もう一ト月待ってみませんか』

と私は云いたいところだ。しかし、一ヶ月後の人工流産では、すこし大きくなりすぎているので、母体の余後が少し案ぜられるのだった。けれども、私はそんなことを口に出して云わなかった。それというのが、以前この女の口から涙なみだをもって聞かされた話があるからなのだ。

この若い女には、彼女の胎児にパパと呼ばせる男がなかったのだ。と云って、その男が死んでしまったわけではない。早く云えばこの女は、親の許さぬ或る男に身を委せ、とうとう妊娠にんしんして仕舞ったのだ。男は、幣履へいりのごとく、この女をふり捨ててしまったのだ。彼女が、星宮君の云うが如きロシアの女には、なりきれなかったのだ。棄てられてしまうと、彼女はやつと目が覚めた。貞操もてあそを弄もてあそばれた悔かい恨こんが、彼女の小さい胸に、深い深

い溝みぞを刻みこんだ。それからというものは、彼女は人が変わったように終ひねもす日おのれの小さい室むろに引籠ひきこもつて、家人にさえ顔を合わすのを厭いやがったが、遂には極度の神経衰弱に陥り、一時は、あられもない事を口走るようになってしまったのだった。

彼女の家庭のひとびとは、彼女を捨てたその男を呪のろつてやまなかつた。中でも一番ふかい憤怒ふんぬをいただいたのは、次兄にあたる人だった。次兄は彼女が幼いときから、特別に彼女を可愛いがっていたのだった。

『大きくなったら、あたいのお嫁さんに貰おうかなア』

などと云つて両親や、伯母たちに散々笑われたほどだった。そんなに可愛いがった妹が、救すくう途みちのない汚辱おじよくに泣き暮しているのを見ると、その次兄は、

『復讐ふくしゅうだ、復讐だ！ きつと其の男を殺して、八ツ裂ぎきにしてやるんだ。おれがその男を殺した廉かどにより、次の日、死刑にされたつていい』

と家中を嘔鳴どなつて歩いたものだ。彼は復讐の方法をあれやこれやと考えたのだったが、遂には、それはすべて無駄だと判つた。それというのが、その男は、星宮君と同じような近代的の主義思想の男で殺されても一向制裁と感ぜないという種類の人物だった——とマア、斯かしよう様に連絡をつけて話をしないと、どうも面白味が出てこない』

軍医はポケットから手帛ハンカチを探しだして汗を拭いた。このとき南に面した硝子窓ガラスまどが、カタコトと鳴って、やがてパラパラと高い音をたてて大粒の雨がうち当たった。

「ほう、これはひどい雨になったな。——で其の次兄ちえぶくろというのが、智恵袋ちえぶくろを、いくたびもいくたびも絞しぼりかえしているうちに、とうとう彼は、その場に三尺も躍りあがるような素晴らしい復讐ふくしゅうを考えついたのだった。それは……」

と、ここまで大蘆原軍医が話してくると、どこかで、

「コトコト、コトコト……」

と扉ドアを叩くような物音がした。三人の男は、サツと顔色をかえると、一斉せいに入口の扉の方にふりむいたのだった。

「吁あッ！」

扉が、しずかに手前へ開いてゆく。

扉の蔭から、若い女の姿が現われた。ぴったり身体についた緋色ひいろの洋装が、よく似合う美しい女だった。

「紅子——」

そう呼んだのは、川波大尉だった。それは、紛れもなく川波大尉夫人の紅子まぎに違いなか

ったのであった。

「紅子、お前は一体、どうしてこんな夜更よふけに、こんな場所までやって来たのだ」

「ちよいと、お顔がみたかったのよ。それだけなの、おほほほほ」

と紅子は笑いながら、悪びれた様子もなく一座を見まわした。このときニヤリと笑ったのは、星宮学士だった。待ち構えたように、それを逸いちはや早く認めた川波大尉だった。彼は軍医の話そちのけにして、スツクリ其の場に立ち上った。

「紅子、お前にちよつと聞くが、儂トルコが土耳其古トルコで買ってきたといった珍らしい彫刻のある指環を、お前にやって置いたが、先日そいつを、どこかで失くしたと云ったね」

「エエそうですわ。でもあれは、もう済んだことじやありませんの」と紅子は、丸い肩を、ちよつとすぼめるようにして云った。

「よオし、無いと判つてりや、よいのだ」大尉はそう云うとクルリと身をひるがえ翻し、いきなり星宮学士の両腕をグツと掴つかんだ。「貴様！ という貴様は、実に怪しからん奴だ。儂わしの女房を誘惑して置いて、よくもあんな無礼ぶれいきわまる口を叩いたな。死ぬのを怖れんという貴様に、殺される苦痛がどんなものか教えてやるんだ！」

実験室の静せいじやく寂じやくと平和とは、古石垣ふるいしがきのようにガラガラと崩れて行つた。

「ウフ。今になって気がついたか、可哀想な大尉どの。だが僕が簡単に殺せると思ったら大間違いだよ」

「言うな、色魔！」

「なにを——」と星宮学士は、右のポケットにあるピストルを探りあてた。それを出そうと思つて、大尉につかまれた右腕を離そうとして、必死に振りきった。ベリベリツという厭いややかな音がして、学士の洋服が引裂けると、右腕が急に自由になった。

(こうなると、こつちのものだ)

そう思つた星宮学士は、ピストルを握つた右の拳をグツと前にのばそうとした。そこを、
「エイ、ヤツ」

と大尉が飛びついて、両腕をグツと捻ねじあげた。学士は捻じられながらも、いきなり大尉の脇腹を力一杯

「ウン！」

と蹴かろとばしたが、この時遅し、大尉は素早く、身体を左に開いたので、気絶することから、辛かろうじて免れたが、その代り、二人の身体は、もつれあつたまま、もんどり打つて床の上に仆たおれてしまった。二人は跳ねおきようと、互たがいに死しにもの物ぐるいの格闘をつづけ、机を

ひっくりかえし、書類箱を押したおしているうちに、どうした弾はすみか、ピストルが星宮理学士の手許をはなれ、ガチャンと音をたてて、向うの壁に叩きつけられた。

「さあ、この野郎。ほざけるなら、ほざいてみる！」

そう云つて、いかにも勝ちほこった名乗をあげたのは、川波大尉だった。星宮理学士は大尉の逞たくましい腕にその細首をねじあげられて、ほとんど宙にぶらさがっていた。が、どんな隙すきがあつたのだろうか、学士は両手を大尉の股間こかんにグツと落とすと、無我夢中になつて大尉の急所を掴つかんだのだつた。

「ウーム」

と大尉が呻うなつた。彼の顔は赤くなり、青くなりしたが、これも死にもの狂いの形相ぎようそうものすごく、学士の身体をグツと手許へよせると、骨も砕けよと敵手の頸くびを締めつけた。学士は朦朧もうろうと落ちてゆく意識のうちに、頻しきりに口を大きくひらいては喘あえいでいた。だが彼の執しゅう念ねんぶかい両手は、なおも大尉の急所を掴んでそれを緩ゆるめようとはしなかつた。この儘ままに捨てておくと、二人とも共き輓やく関かん係けいにおいて死の門をくぐるばかりだつた。

「紅子、うう射て……ピストル、いいから……」

大尉の声は、切れ切れに、蚊細かほそく、夫人の援助をもとめたのだつた。

このとき紅子は、いつの間にかやら、右手にしつかりとピストルを握りしめていたが、夫大尉のこの声をきくと、莞爾かんじとほほえんだ。

「いいこと！」

紅子のしなやかな腕がグツと前に伸びる。キラリとピストルの腹が光って、引金がカチリと引かれた。

「ズドーン！」

銃声一発——大尉と学士とは、壁際かべぎわから同体に搦みあつたまま、ズルズルと音をさせ、横たおに仆れた。

ピストルの煙が、やっと薄らいだとき、仆れた二人のうちの一人が、フラフラと半身を起した。それは大尉にはあらで、意外にも星宮理学士だつた。

彼は、紅子が一発のもとに射ち殺したのは、彼女の夫君ふくんである川波大尉だと知ると、咄と嗟つさのうちに氣をとり直し、威厳をつけて、ノツソリ起きあがると、フラフラと紅子の方に歩みよるのだつた。

「星宮君。ここへ懸け給え」

このとき、静かに云つたのは、この場の生命のやりとりに、一と言も口を利かず、片腕

もあげなかつた奇怪の人物、おおあしはらぐんい大蘆原軍医だいらぐんいだつた。自分の名をよばれると、さすが流石の星宮理
学士も、ギョツとして、その場に立ち竦すくんだ。

「星宮君。私の第三話が、もうすこしで、尻切しりきれ蜻蛉とんぼになるところだつた。幸い君は生命
をとりとめたようだから、サアここへ坐つて、あの話の続きを聞いてくれ給え」

軍医は、落着きはらつて、空虚になつた二つの椅子を指した。学士は、眼に見えぬ糸に
操あやつられるかのように、ヨロヨロとよろめきながら、やつとその椅子の傍まで近付くと、崩
れるように、その上に腰を下ろした。

「……」

「さア、いいかね、星宮君。さつきは、僕に手術を頼んだ娘の次兄というのが、素晴らし
い復讐方法を、妹をかどわかつた男に加えるため、考えついた、というところまで話した
のだったね。サアその続きだが、さて、あの女の次兄が考えだした讐打あだうちちというのはね、
死をも怖れないと自称する人間に『死』以上の恐怖を与えることにあつたのだつた。それ
で次兄は、今夜妹を人工流産させることに決心したのだ。手術は四十分ばかりかかつたが、
私の手で巧く終了した。摘出されたのは、すこし太い試験管の、約半分ばかりを占領して
いる四ヶ月目の××××××だつた。いいかね、その試験管の底に沈ちんでん澱でんしている胎児は、

その男と、あの可憐なる少女とが、おのれの血と肉とを共に別けあつて生長させた彼等の眞実の子供なのだった。でも母親の胎内を無理に引離され、こうしているその胎児には、もうすでに生命が通つていないのだった。闇から闇へ流れさつた、その不幸な胎児の、今日は命日なのだ。その胎児にとつて、今夜のこの話は、本当の意味の通夜物語なのだ。これだけ云えば、星宮君、君にはなにもかも判つたろう。あの胎児の父は、君なのだ。あの胎児の母は、ちどり子と呼ぶ。さて此処で、君から訊かして貰いたいことがある。君に返事ができるかね。

先刻、君は私の手料理になる榮螺を、鱈腹喰べてくれたね。ことに君は、×××××、箸の尖端に摘みあげて、こいつは甘味といつて、嬉しそうに食べたことを覚えているだろうね。

それで若し、私が、あのちどり子の次兄であつたとして、いやそう驚かなくてもいいよ、先刻、君が口中で味い、胃袋へおとし、唯今は胃壁から吸収してしまつたであろうと思われる、アノ×××××が、榮螺の内臓でなくして、実は、君の血肉を別けた、あの胎児だつたとしたら、ハテ君は矢張り、

『×××××を、ムシヤムシヤ喰べてみたが、たいへんに美味かつた』

と嬉しがって呉れるだろうか、ねえ星宮君——」

「ウーム。知らなかつたツ」

と、ふり絞るような声をあげたのは星宮理学士だつた。その顔面はみるみる真青になり、ガタガタと細かく全身を震わせると、われとわが咽喉のあたりを、両手で掻きむしるのだった。

ああ、時はもうすでに遅かつた。いま気がついて、ムカムカと瀉き気を催しても、彼の喰つた榮螺は、もはや半ば以上消化され、胃壁を通じて濁つた血となつたのだった。頸動脈を切断して、ドンドンその濁つた血潮をかいだしても、かい出し尽せるものではなかつた。彼の肉塊をいちいち引裂いて火の中に投じて、焼き尽せるものではなかつた。彼は自己嫌悪の全身的な嘔吐と、極度の恐怖とを感ずると、

「ギヤツ」

と一声、獣のような悲鳴をあげて、その場に卒倒したのだった。呪われたる人喰人種——

×

それを見届けると、大蘆原軍医は始めて莞爾と笑つて、側らに擦りよってくる紅子の手

をとつて、入口の扉との方にむかつて歩きだした。

今宵、紅子は、彼女の良人おっと、川波大尉を射殺して置きながら、それを振返ってみようともしないのは、どうしたことであるか。それは、川波大尉こそは、第一話に出て来た熊内中尉に、あの恐ろしい無理心中しそを使し喚せうした悪漢だった。そのために、当時、鮎川紅子あゆかわべにこと名乗っていた彼女は、愛の殿堂でんどうにまつりあげておいた婚約者の竹花中尉を、永遠うしなに喪なつてしまったのだつた。

いわば、今宵こよいの良人おっと射殺事件は、あたかも竹花中尉の敵かたきう打ちをしたようなものだった。この隠れた事実を、紅子が知つたのは、極ごくく最近のことで、それを教えたのは、炯眼けいがんきまわる大蘆原軍医だった。今夜の紅子の登場も、無論、軍医の書いたプログラムの一つだった。

ここへ来て、この軍医を賞讃する前に、読者諸君は、すこし考えてみなければならぬ。それは、いくら愛する妹の復讐とは云え、彼女の産みおとしたものを、人間に喰わせるという手段が、人道上許されるものであろうかどうか。奇怪にも友人の細君だった婦人を、狎なれ狎なれしく、かき抱いてゆく大蘆原軍医は、誰よりも一番恐ろしい、鬼か魔かというべき人物ではあるまいか。

それはそれとして、二人の姿が、戸外の闇に紛^{まぎ}れて、見えなくなつた丁度その時、血みどろに染つた二つの死骸が転つてゐる実験室では、真夜中の十二時を報ずる柱時計が、ポーン、ポーンと、無気味な音をたてて、鳴り始めたのだつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第1巻 遺言状放送」三一書房

1990（平成2）年10月15日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1931（昭和6）年12月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：ペガサス

2002年10月21日作成

2011年2月18日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

恐しき通夜

海野十三

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>